布田小地区ハッピータウン協議会

Happy Times

2025年8月　第26号
広報委員会　年2回発行
地域内 計4300部 戸配

問合先：調布市協働推進課
042-481-7036

布田小学校 七色の虹

オリジナルソング完成

梅雨も終盤に差し掛かった7月1日(火)、布田小学校の新しい歌「七色の虹」の発表がありました。六年生全員による合唱が体育館に響き渡り、聴いていた在校生・保護者の皆さんもその優しい歌声に引き込まれていました。

ハッピーうさこ

https://youtu.be/6xxIqrc3ZFY

当日の歌声をここで聴くことができます（声のみ）

当地区協が発足した当時に、布田小学校で飼っていたうさぎをイメージシンボルにしました。

「七色の虹」

♬ 透き通る風が
めぐりくる季節に
大きな虹が立ち上がった
ほら　あの坂道の向こう側
のぼって行けば
たどりつ着くかな
七色の虹
心の中にも立ち上がれ

ゆるぎない勇気が
空に満ちる季節に
大きな虹が立ち上がった
ほら花咲く土手の向こう側
超えていったら
たどり着くかな
七色の虹
僕らの心に立ち上がれ

美しいあこがれが
光あふれる季節に
大きな虹が立ち上がった
ほら　色づいた木立の向こう側
走っていけば
たどり着くかな
七色の虹
みんなの心に立ち上がれ

やさしさのぬくもりが
懐かしい季節に
大きな虹が立ち上がった
ほら　梅の梢の向こう側
調べをつけて
♫ 歌おうか
七色の虹
みんなの心をあたためて

七色の虹
あしたのみんなに立ち上がれ

作曲　布田小教諭　加嶋千秋

虹は憧れの象徴です
虹は美しいものの象徴です
虹は夢の象徴です
虹は平和の象徴です
虹は・・・まだまだあります
という具合に、私は「虹に」に
大きな意味を託してこの詩を
書きました
布田小に通う子どもたちと
ここに勤める大人たちみんなを
イメージして書きました
詩作のスタートは、校歌末尾の
「明日の子どもが願うのは世界に
虹をかけること」という歌詞です

「七色」と繰り返すの理由は
１年生が赤色
２年生が橙色
３年生が黄色
４年生は緑色
５年生は青色
６年生は渋い紺色
そしてもう一色
紫色は先生や主事さんたち大人を
意味することばです
みんなで虹を作りましょう！
それはまさに夢の世界のようですね

詩には布田小の子どもであれば
ぴんとくるキーワードを
ちりばめました

そして加嶋先生がつけた唯一無二の
メロディにのせて歌うとき
それが布田小の子どもだけで感じる
素敵な価値になるでしょう
２０２５年７月

作詞　布田小校長　横山公一

◇「歌の情景」◇

七色の虹、ちょうど前の週に雨上がりの南東の空に大きく立ち上がった虹を思い出しながら聴きました。

詩の中にある坂道、土手などが子どもたちの心に残り、大人になったときその旋律とともにその情景が自然に思い出してくれたりしたら素晴らしいな～。

そして六年生が歌うのを聴いていた五年生が、二学期にある市の小学校連合音楽会で私たちも歌いたい、とさっそく申し出たそうです。

よりよい地域を作ることが、子どもたちの成長の一助に間違いなくなるということをこの歌を通じて改めて強く感じました。

皆さんが愛するこの地域の願いや希望がそこに住む全員の未来への光となるよう、当地区協へのご理解とご協力のほどをよろしくお願い申し上げます。

布田小地区ハッピータウン協議会
会長　依田 耕児

10筋

10の筋力トレーニング ・・・フレイル予防・・・

【9月5日 / 27日】
（10 月以降日程は地区協 WEB サイトをご参照ください）
10 時～ 11 時半、参加申込不要、直接会場（布田南部自治会館）に来てください。

7 月 25 日（金）、調布の薬局に実習できている薬学生３名（前列）がハッピー 10 筋体操を体験しにきてくれました。

10 筋を紹介した動画も覗いてみてください。

みまもり安心アテンダント急募！

朝の登校時の通学路 みまもりボランティア

布田小学校への朝の通学時のみまもりボランティアを下記２箇所（1 名ずつ）で急募しています。

朝７時 45 分～ 8 時１５分の約３０分間、通学する児童を要所の道路に立って見守ります。**①布田小西側信号前 ②白山宮神社横断歩道付近**

毎日でなくても結構ですのでご関心のある方はどうぞお問い合わせください。（布田小副校長 坂井 481-7652）

2025 年 新運営委員さん（敬称略）

①：趣味　②：好きなことば　③：ひとこと

室田 信一
むろたしんいち
～監事（都立大准教授）～

①：スポーツ観戦（千葉ロッテマリーンズのファンです）
②：Let the People Decide
③：布田に引っ越してきて８年ほどになりますが、豊かなご近所付き合いがあり、地元のお祭りもあり、美味しいレストランもあり、そんな素敵なコミュニティの一員になれたこと嬉しく思っています。

吉実 加奈
よしざねかな
～布田小 PTA 会長～

①：ゴルフ　②：常にあきらめない　③：布田に引っ越してきて５年が経ちましたが、地域の方々に優しく迎え入れていただき感謝しております。昔からずっと住んでいたような気持ちで楽しく過ごしております。どうぞよろしくお願いいたします。

松本 恭嘉
まつもとやすよし
～民生児童委員～

①：散歩　②：（あまりさがしたことが無かったので思いつきません。③：還暦を迎え残り 20 年を自分だけの時間にしよう何をしようか考えていたら、４月から多摩川６丁目の民生児童委員に委嘱されました。自治会、協議会も一緒のパッケージのようです。地区協では何をしようか検討中です

布田小地区ハッピータウン協議会
ホームページ
https://happy-usako.jp
スマホ対応で見やすくなりました

はっぴーなきずな

人生 100 年時代、仕事から解放された今こそ、地域のボランティアに参加して新しい世界を発見しませんか。あなたの経験と力が地域で感謝され、生きがいにつながります。ぜひハッピータウン地区協議会へご連絡ください。

（コミュニティスクール 西原幸子）

「ありがとう」は人と人をつなぐ魔法の言葉。挨拶やちょっとした手助けに感謝を伝えるだけで、相手の心が和らぎ、自分の気持ちも前向きになります。小さな感謝が、地域のあたたかさを育ててくれると感じる今日この頃です。

（監事 山田達也）

防災教育の日

現実の災害時に役立つ防災教育とは

例年通り、ゴールデンウィーク直前の土曜日4月26日、令和7年度の防災教育の日の訓練が実施された。この日は曇天、朝方は少し肌寒く感じるほどだった。三年前の2022年から、調布市の全小学校に対して一律に作成された訓練マニュアルに従い、各小学校の近くに住んでいる市職員を初動要員と定め、10数名の市職員が中心となって活動する形の防災訓練だ。今回の市統一テーマは避難所開設訓練と定め、災害発生時の初期対応に焦点が合わされている。

災害が市役所開庁時に発生した場合には、布田小地区担当の市職員が駆け付けて避難所の開設に当たるが、閉庁している夜間や休日であれば初動要員が避難所開設を行うという想定だ。布田小校門の開け方に始まり、体育館解錠の手順と進んでいくのだが、分かり難かったり間違えたりと言った小さなトラブルが起きるのは当たり前、そのための防災訓練なのだから。とは言いながら、全市一律のマニュアルなので各小学校特有の状況などは盛り込めないし、布田小に来るのは初めてという市職員の方もおいでだった。

防災教育の一環として、災害発生を想定して全校児童が校庭に一時避難し、連絡を受けた保護者が児童を引き取りに来るという訓練も行われる。この訓練に参加した児童と保護者の方々に、避難所開設訓練で体育館内に設置したテントや簡易トイレ、段ボールベッドなどの避難所体験をしてもらうことも、防災教育の目的の一つだ。昨年は体育館にこうした避難所の設営がされていることを知らずに、そのまま帰宅してしまった保護者・児童が多かったことを踏まえ、体育館前で言わば呼び込みを実施。おかげで160名を超える見学者に体験してもらうことができた。

土曜日とあって、男性の保護者と連れ立って訪れる児童も多く、避難所でプライバシーを確保するテントの中では、遊具感覚で走り回る姿が微笑ましい。最後のテーブルはお土産コーナーで、非常食のアルファー米や飲料水を選べるようになっており、年々新しくおいしい製品が出される非常食を持ち帰って体験できる。どうやら子供たちの一番人気はドライカレーのようだった。

体育館に配置された避難所備品を見学する皆さん

無事、防災教育の日のプログラムが終了した後、市職員は新しい経験や気づきがあったと言った感想を述べられる方が多かったが、地区協参加者からは市職員の訓練になって良い面はあるが、実際の避難所開設と運営のレベルは毎年ほとんど変わっておらず、現実の災害発生時にどこまでできるのか分からない、と言った意見が出されていた。コロナ前に作成した「布田小の避難所開設マニュアル」を見直して、その重要ポイントについて調布市・布田小・地区協・自治会・地域住民など、避難所に関与する人達で共有しておくべき時期なのかも知れない。

子ども食堂 & やぎの放牧

子どものころの思い出になればいいな〜

5月17日の土曜日は朝から雨、でも気温は20度越えなので寒くはない。当地区協のプロジェクトの一つとして2018年から実施しているハッピー子ども食堂の第16回を、白山宮境内の布田南部自治会館二階で開催した。コロナの時期には大人数での会食が難しかったため、EZYランチパックの名称でレトルト食品やおやつを配るフードパントリー形式のイベントに形を変えたが、昨年から子ども食堂も復活。現在はEZYランチパックとほぼ交代で実施している。いずれも中学生以下の子どもと同伴の保護者が対象で、布田小や地区協ホームページでお知らせし、オンラインツールで申し込みをして頂く形式だ。

この日のメニューはキーマカレーにサラダ、ゼリーのデザート付きだ。11時半のオープンを目指して自治会館一階の狭いキッチンは大忙し、実行委員以外にも10名ほどのボランティアの助けも借りて、70人分を越す食事を当日朝から準備するのはなかなかの作業だ。

オープンの約15分前、傘をさした女の子5人連れが早くも会館の入り口前に並んだ。楽し気におしゃべりしてはいるものの、雨も強くなって来たので少し早めに受付け。一人百円を払って（同伴保護者は300円）胸に名前シールを貼って階下で待機。ボランティアさんに囲まれて少し恥ずかしそうだったが、子どもたちだけで外で食事をするというイベントを楽しんでいるようだった。

オープン後30分もすると会館二階のテーブルはほぼ満席。一番乗りの女の子たちと同じように、近所の友達や同級生で連れ立って来た子どもグループが大半で、保護者はチラホラ。カレーのお代わりも出来ると聞いて、嬉しそうに列に並ぶ子も。実行委員は雨で出足が鈍る心配をしていたが、来場者が集中することもなく、適度に分散されて良かったと胸をなでおろしていた。また、受付け机の横に置いた募金箱に、帰り際に小さなお財布から10円玉を入れてくれる子がいるのも、主催者には嬉しい励みだ。「明日は下布田遺跡でヤギさんとのふれあいがあるよ」と、翌日のイベント告知ビラを渡して宣伝も抜け目なく。

そのイベントは調布市郷土博物館と社会福祉協議会との協力で4年ほど行っている、下布田遺跡の除草を二頭のヤギにやってもらうプロジェクトの一環で、5月から8月までのヤギ除草期間中の日曜日3回、ヤギとのふれあい環境学習を開催するもの。当地区協メンバーも運営のお手伝いをしている。

前日の雨は上がったが、梅雨の終わりを思わせるような蒸し暑さとなった5月18日、二頭のヤギが日頃の除草場所から、分室建物裏手のふれあい会場に移動してきた。それだけでなく、子どもたちが餌としてヤギに食べさせるのに適した大きさの草や、雑菌を持ち込まないようふれあい前に靴底を殺菌するマット、草むらから子ども達を狙っていそうな虫を遠ざける蚊取り線香などなど、ふれあいと言っても念入りな準備が欠かせない。

ヤギのイベントは日曜日ということもあってか、保護者と一緒にやって来るグループが多いようだ。受付ではお土産に地区協メンバーが作った缶バッチをもらえる。やはりヤギのデザインのものは直ぐに無くなってしまった。初めて間近で見るヤギを怖がって保護者にしがみつく子もいれば、手に持った草をヤギの口もとに押し付けて無理やり食べさせようとする子も。「ヤギさんもだいぶお腹一杯になってしまったかな」とお世話係の方が苦笑まじりに話しかけておられた。

たまたま二日連続して行われた子どもイベント、子ども食堂もヤギとのふれあいも主催者にはそれなり準備の負担がかかるし、イベント中に事故の無いようにと気遣いも必要だ。しかし参加した子どもたちにとって、毎日の生活の場である地元で経験したちょっとした非日常が、忘れられない地域の思い出になっていることがある。イベント会場での子どもたちの笑顔や歓声は嬉しいものだが、そんな子どもの頃の思い出作りになっていれば疲れも吹き飛ぶ。

オリジナルの缶バッチを作成

地域の活躍びと

地域の子どもたちにも貴重な農業体験を

布田小の高学年生が毎年田植えや稲刈りでお世話になっている、斉藤農園に齊藤修太郎さんをお尋ねしたのは7月13日のお昼過ぎ。前週までの早すぎる猛暑が少し落ち着いた日曜日、午前中の農作業を終えた農業ボランティアの矢城敏一（やしろとしかず）さん・溝上誠一（みぞがみせいいち）さんと一緒に、農園脇の作業小屋で出迎えて下さった。

作業小屋の真ん中に置かれたテーブルを囲んで、早速お話をお聞きした。「あの頃の農業は3K職場の代表のように言われていましたよね」と、斉藤さんが職業としての農業を始められた20数年前の思い出から話された。まだ20代だった斉藤さんが突然農業を始めることになったきっかけは、お父様に連続して降りかかった仕事と健康上の災難だった。お父様は農業とは違う仕事を始められ、同時に田畑の大半を調布市の自然観察農園事業に貸与されて、児童館と共に健全育成活動としての農業体験「親子田んぼクラブ」を始められた方。当時は学校単位ではなく、公募で集まった小学3年生以上の児童とその保護者が対象で、農園長であるお父様と農園で作物をつくっている市民の会メンバーが、農作業の指導と日々の田んぼの管理作業を提供していたとのこと。同様の形は現在の布田小の稲作体験に引き継がれている。

突然の引退を余儀なくされたお父様に代わって、斉藤家の主となった修太郎さんにとって、それまで経験はしていても農業を生業として選択する決断は生易しいものではなかったはずだ。農協の先輩や青壮年部の方々の助言・激励もあったそうだが、想像するに修太郎さんの血に流れているDNAが最後の一押しとして働いたのではなかろうか。

その後、専業農家という調布市では決して多くはない事業を軌道に乗せたばかりでなく、生産技術の面でも経営面でもゆるぎない評価を

斉藤 修太郎さん

（さいとう　しゅうたろう）

〜斉藤農園〜

する。これは、農業に最適とは言えないハケ下の土を、長年に渡って育ててきた成果として嬉しい、と斉藤さん。

最後に布田小の稲作実習についてお聞きしようと思ったが、筆者が以前から気になっていたことを聞いて見た。布田小の田んぼは、自然観察農園の流れもあり、斉藤さんは布田小開校と同時に入学した初代一年生でもあり、何より布田小から歩いてすぐでもあり、非常に分かりやすいが、隣に笹塚中学の田んぼがあるのはなぜですか、と。

それまでも時々斉藤さんとの会話に入って来られていた農業ボランティアの矢城さんが、身を乗り出して来られた。実は矢城さんご自身が笹塚中ご出身。矢城さんよりも年上の方々が笹塚中のおやじの会役員をされていた平成元年前後、笹塚中が荒れてしまい、保護者としても具体的な行動を起こさなければ収拾できないという危機感を持って京王線に飛び乗り、23区を外れた最初の市である調布に降り立ち、調布市役所に相談に行ったのがそもそもの始まりだったという、テレビドラマにでもありそうなお話。ちょうどその頃、斉藤さんのお父様が自然観察農園を始められていたので、まさに渡りに船とばかりに笹塚中版の親子田んぼクラブが始まり、現在までその流れが引き継がれているのだ。

子ども達が健やかに育って欲しいと願う心は、斉藤さん父子にも農業ボランティアの方々にも、しっかりと根付いているのが頼もしく嬉しい限りだ。

（取材・藤田秀雄）

得るようになるまでの苦労は、斉藤さんご自身は語ろうとされないが、「妻と家族には本当に感謝している」という言葉がそれを物語っていると思う。実際、斉藤さんは年間40〜50品目に及ぶ農作物を栽培されており、いわゆる近郊農業として消費者に多種多様な品目を新鮮な状態で届けた実績に対して、東京都の表彰を受けられている。また、最近では良質の白菜を収穫したことでも東京都知事賞を受賞されてい